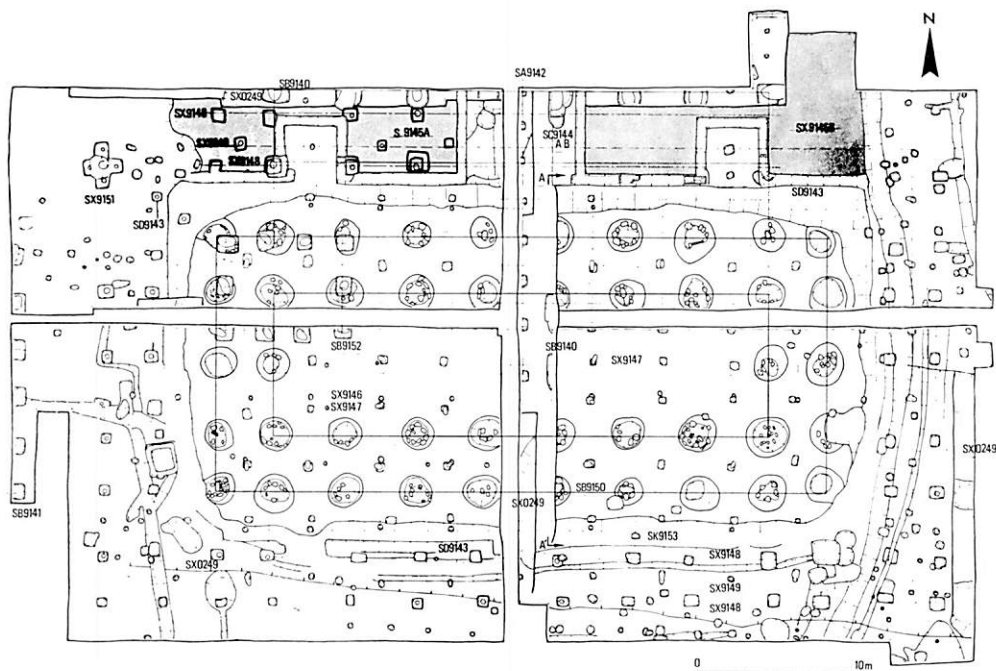


平城宮大極殿の調査

平城宮跡発掘調査部

近年、難波宮、長岡宮、恭仁宮などでいわゆる大極殿遺構が次々に解明されてきた。平城宮の大極殿については、昭和30年、大極殿回廊の東南隅を平城宮の第1次調査として発掘したほかは未調査のままであった。その理由の一つに、大極殿土壇上の松の木が存在があった。この木は大正時代に平城宮跡の保存を始めた人々によって植えられたものであり、長い間「大極殿の松」として親しまれ、平城宮研究の端緒となったこの土壇と共に平城宮跡の象徴ともいえるものであった。しかるにこの老木も数年前から松喰虫の被害を受け、以後薬剤等の治療の甲斐なくついに昨年度枯死してしまい除去せざるをえなくなった。この後どのような整備を行うかが問題になったが、何れにせよ遺構の解明が不可欠であるとの考えにたち、平城宮跡第113次の調査として大極殿の調査を行なったわけである。検出した遺構には前方後円墳1、礎石建物1、掘立柱建物3、柱穴列1、土壇1などがあり、このうち、建築遺構は奈良時代前半期（下層）後半期（上層）それに9世紀後葉の3時期に分けられる。

下層遺構 宮造営以前にこの地区に存在していた前方後円墳（神明野古墳 SX0249）を削平し、同時に緩斜面を平坦に造成している。下層遺構はこの整地面に造営されたもので SB9140、SB9141、SA9142がある。掘立柱建物 SB9140は桁行7間、梁行4間、15尺等間の東西棟である。平面型式は四面廂と推定され、北廂は大極殿 SB9150の建つ基壇の北側で検出し、南廂は



推定第2次大極殿基壇遺構図

基壇断ち割り箇所において確認した。この建物の南北方向の中軸線は後述の S B 9150 と同一で梁行の柱筋も一致するが、建物位置はやや北に寄る。S B 9141 は調査区の西端にある 5 間以上、10 尺等間の柱列で、更に南に延びる南北棟建物である可能性が高い。S A 9142 は基壇断ち割り箇所 で 7 間分を検出した。S B 9140 の南北方向の中軸線上にある柱穴列で更に北に延びることも考えられる。柱間寸法は 7 ～ 10 尺と不揃いである。

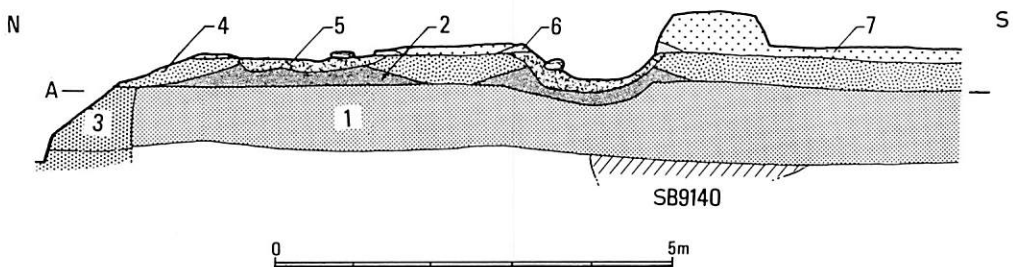
上層遺構 下層建物廃絶後に造営された基壇建物とそれに付随する諸遺構である。S B 9150 は東西 46.0m (155 天平尺)、南北 23.8m (80 尺) の凝灰岩壇正積基壇の上に建つ礎石建物で、桁行 9 間 (129 尺)、梁行 4 間 (54 尺)、四面廂付の東西棟である。柱間寸法は身舎 15 尺等間、廂の出が 12 尺で側柱心からの基壇の出は 13 尺である。基壇の残存状態は良好で、礎石は残っていないがその据付位置を全て確認することができた。階段は南面では中央間とその東西の 3 間目の 3 ケ所に設けられる。北面も同様に南面と対応する位置にあるが、中央階段には大極殿後殿に連なる軒廊 S C 9144 B の基壇 (幅 8.15m) が取り付く。軒廊基壇には大極殿基壇北端から北約 3.3m (11 尺) に梁行柱間寸法 4.5m (15 尺) の一対の礎石抜取痕跡がある。軒廊は当初幅 3.8m であったものを後に拡幅している。階段幅は 4.45m (15 尺)、出は 3.55m (12 尺) である。東・西面では後述する足場 S X 9148 の柱位置の状況から、南から 2 間目の位置に各 1 ケ所の階段を設けていたと推定される。S D 9143 は地覆石の抜取痕跡で、幅 60cm 前後、深さ 30cm の溝状を呈する。同遺構は基壇北側では残存状態が良好で、西・南側でも部分的に確認した。北面東階段の西入隅部分には凝灰岩地覆石が 2 点、東西方向に相接して原位置に残存していた。上面には羽目石および東石を受ける継ぎ合せ仕口が明瞭に残る。基壇周囲には前後 2 時期にわたって石敷が敷設される。当初直径 1 cm 前後の小礫敷 S X 9145 A であったものを後に嵩上げて直径 5 ～ 15cm の礫を敷き詰めた小石敷 S X 9145 B に改修している。石敷遺構は基壇北側で検出したもので、東・西・南側では後世の削平のため残っていない。基壇中央部分を南北方向に断ち割り次のような基壇築成工程を明らかにした。(1) 南に緩やかに傾斜する下層整地面上に、まず一まわり小規模な土壇① (南北 20.5m、東西約 41.9m) を築成する。この上面は水平面であるので高さは北で 75cm、南で 120cm を測る。積土には下半部に小礫を多く含む暗褐色粘質土を多用し、上半部には精良な明黄褐色粘質土を用いており、厚さ 2 ～ 10cm の版築層が 15 ～ 16 層数えられる。(2) 土壇①の上面の礎石据付位置に基底部での直径 2.7 ～ 3.2m、高さ 0.50 ～ 0.55m (復原値) の円丘形の盛土②を行なう。円丘の基底部に厚さ 2 ～ 5cm の固く締った層を凸レンズ状に 2 ～ 3 層積上げた後、厚く粘質土を盛るもの (北側柱位置) と土壇①の上面を 30cm 程椀底状に掘り下げてから粘



凝灰岩地覆石 (北面東階段西入隅部)

平城宮大極殿の調査

質土を埋めて円丘を形成するもの（入側柱位置）とがある。この相違は礎石抜取痕跡から推測される礎石の厚さに対応しており、礎石据付のための仕事の差をあらわしている。(3)土壇①の四周を全面的に30cm程地下げを行ない基壇を拡幅する。その幅は南側1.25～1.40m、北側1.05m、西側1.42mで東側は未確認である。この部分の版築層は厚さ3～20cmの粘土あるいは砂質土で小礫や凝灰岩細片を多く含み極めて固く締っている（土壇③）。南側では①と③の間には縦方向に幅9cmの非常に脆い土層が認められるが、性格については不明である。なお軒廊の前身基壇S C 9144 Aはこの拡幅と一体となって築成され、厚さ5～10cmの固く締まる層を積上げている。一方軒廊基壇拡幅部分の積土には凝灰岩片や瓦片が混入しており土質も柔らかい、(4)土壇①の上面に足場S X 9146を組む。そののちに土壇①・③および円丘形盛土②の上全面にわたって版築を重ねる（積土④）。版築層は5～6層あり全体で35～38cmの厚さである。小礫を多く含み全般的に固く締っている。(5)④の最上層に厚さ5cm前後の暗黄白色砂質土を全面に均一に敷き詰め、この段階で礎石据付の掘形を掘削する。掘形は④の積土と②の円丘形盛土部分を碗底状に掘りくぼめており、その深さは礎石の厚さに対応していると考えられる。掘形内には固く締った黄灰色の粘質土と礎石の根固め石があり、根固め石には直径20～80cmの河原石が使用される。また礎石据付痕の底面に直径5cm前後の小礫を敷いている箇所もある。(6)礎石を設置した後、礎石の周囲に淡黄褐色粘土の根巻土を盛り上げ礎石の安定をはかる。(7)更に全面にわたって版築による積み上げを行ない土壇部分の築成を完了する。なお残存していた基壇の高さは地覆石上面から1.3～1.5mである。(8)階段裏込の積土を行なう。厚さ7～20cmの版築層であるが、基壇本体よりも粗雑である。以上のような築成工程が確認されるのであるが、この中で②にみる円丘形盛土は、礎石の厚さに対応して予め土壇①の上面を掘りくぼめており、また積土④の段階では円丘形盛土の頂部つまり中心部が④の上面にみられたと推察されるので、礎石据付のための基礎地業であると同時に据付の位置表示の機能を果たしていたことも考えられる。一方③の拡幅部分については、基壇の改作＝拡張という可能性も否定しきれないが、前身軒廊S C 9144 Aの基壇と一体となって築成されており、一連の基壇築成過程における一工程と解釈している。S B 9150に付随する遺構として、造営、解体に伴う4種類の足場がある。S X 9146はS B 9150の造営に伴う基壇上の足場である。柱位置はS B 9150の柱間中央通りにある。S X



S B 9150基壇断面図（北半部）

9147はS B9150の解体に伴う基壇上の足場で柱位置はS X9146と同様にS B9150の柱間中央通りにあるが身舎の内側部分の棟通りにも配される。S X9148はS B9150の造営に伴う足場で基壇の四周を二重に囲むように柱を配しているが、西北隅と東北隅の4間分の柱穴がない。梁行の柱筋はS B9150の柱筋とほぼ一致するが、北面、南面の階段部分では17尺と広く、その両側の柱間が1尺ずつ狭くなっている。東面、西面についてもS B9150の南から2間目の位置のS X9148の柱間寸法が17尺であり、前述のようにこの位置に階段が設けられていたと推察される。S X9151は基壇北西隅から西3.0mの位置にあり、十字型の掘形をもつ。中央に径50cm程の柱を、四方に径25cmの柱を設置している。S X9149はS B1950の造営に伴う足場で基壇の四周を一列に廻る。柱位置はS B9150の柱間中央通りの延長上にあり基壇端から1.5m離れている。この足場は基壇上の足場S X9146と一体となって機能していたことが考えられる。

平安時代の遺構 基壇上西北隅にある掘立柱建物S B9152は桁行3間、8尺等間、梁行2間、9尺等間の東西棟でS B9150の廃絶後に建てられている。柱は全て抜き取られ、柱抜き穴埋土から9世紀後葉に属する土師器が出土している。S K9153は基壇南側面の傾斜面に検出した径50cmの円形土壙である。埋土中には黒色炭化物が含まれ、底面からは鉄製紡錘車と10世紀後葉に属する土師器皿4個体が出土した。

遺物 遺物は大半が瓦類である。完形に近い丸・平瓦も多く鬼瓦・熨斗瓦などの道具瓦もある。軒瓦は包含層から出土したものを含めると軒丸瓦85点、軒平瓦96点が出土した。そのうち軒丸瓦は平城宮第Ⅱ期の6225型式が44点(51.8%)、軒平瓦も同時期の6663型式が63点(65.6%)あり、他型式を圧倒している。

まとめ 従来の成果(大極殿回廊東南隅地区(第1次調査)、東朝集殿地区(第48次調査))と考え合わせると、特に軒瓦の共通性から大極殿S B9150、回廊とその南に拡がる朝堂院地区の造営が同時期であることが明らかになった。時期については造営時の所用瓦と考えられる軒丸瓦6225型式、軒平瓦6663型式が平城宮第Ⅱ期(養老5～天平17年)に位置付けられていることから、その期間内に造営時期を想定することができる。『続日本紀』に拠ると天平12年(740)の恭仁遷都に伴い平城の大極殿並びに歩廊を遷造したとされる。恭仁宮大極殿は先年実施された京都府教育委員会の発掘調査によると桁行9間、梁行4間の四面廂付東西棟で、柱間寸法は身舎桁行17尺、梁行18尺、廂の出15尺であり、S B9150より大規模であるから、天平12年に運ばれた「平城大極殿」はS B9150ではあり得ないことになり、前記の造営想定年代に若干の無理が生じてくる。この問題についてはS B9150基壇築成における前述の工程を一連のものとするか、2時期とみるかにも大きくかわり、また下層遺構の時期、性格とも関連してくるが、今後の検討に委ねたい。S B9150の廃絶に関しては、その時期を示す遺物は皆無であるが建築部材をはじめ礎石、基壇化粧石に至るまで短期間に意図的に抜き取り運び去っている状況から、長岡遷都(延暦3・784年)あるいは平安遷都(延暦13・794年)に関連すると思われる。(井上 和人)